

★2021年11月25日 インクルーシブな環境ってなあに？～子どもの教育現場と遊び場から考える～

特定非営利活動法人

キッズデザイン協議会

事前質問、チャットでいただきました質問の回答は以下の通りです。

無断転載・複製・複写禁止

参加者からのご質問		回答	
1	インクルーシブな環境づくりに取り組むきっかけをつくるには、教育現場や企業活動の中でどんな方法が有効でしょうか。	二羽先生	どのような体制の企業なのかによって変わってくるかもしれませんが、きっかけとしては、現状インクルーシブになっていないことで起きている問題や、インクルーシブにしていきたいという思いを、共に働くみなさんが共有することが重要だと思います。ですので、例えば最初は関心のある有志で勉強会を始めて、少しずつネットワークを広げていくような企画を考えていくのもいいですし、社内の人が気軽に参加できるイベントなどを企画して、現状困っていることはどんなことで、インクルーシブになるとどう変えていけそうか、というビジョンを共有する機会を創るのもいいかと思います。
		北村様	インクルーシブな環境づくりは、これまで接点のなかった方と話をすること、お互いを知ることから始まると思いますので、ボランティアや、イベントなどであえて接点をつくってみるのが良いと思います。最初のきっかけとしては、お年寄りや妊婦さんの体験、音のない世界や光のない世界の体験などさまざまな体験ができる場があるので、参加してみるのも良いかと思います。
2	弊社は主にエクステリア(フェンス、カーポートなど)をメインに商材を扱っている商社ですが、二羽先生、北村様がお考えになる子供にやさしいお庭や、あそび場などはどのようにお考えでしょうか。よろしくお願ひいたします。	二羽先生	物理的な設計デザインは専門ではないので分からないのですが、企業が取り組んでいらっしゃることは物理的なことであっても、企画・設計・営業される方たちが、多様な子どもたちが自由に集まり出会う場所というように、庭や遊び場ができた後の風景のイメージを持ちながらお仕事をされることによって、自然と子どもたちに優しい場が生まれてくるのではないかと思います。
		北村様	おとなの思い込みや管理の都合を優先するのではなく、日ごろから子どもたちの行動をよく観察することから本当に子どもたちにとって楽しく居心地がよい場は生み出されると思います。
3	インクルーシブ教育の根本理論は、多様性の実現とっていますが、現実には、制度のみ先行しており、結局本人をまわりとは違うと認識させるだけになっている。社会・家庭のあり方を知りたいです。	二羽先生	多様性を認め合える社会と言われますが、実際にはそうした表現だけでは、多様性を認め合う方向には進まない現実があります。その一因として、様々な人を尊重しようとすることによって、今まで享受できていた様々な利益が侵害されてしまうのではないかと感じる人たちの抵抗があるからだと言われることがあります。社会でも家庭でも、なぜ今までは多様な人たちが周囲になかったのか、なぜ出会う機会を創ろうとしなかったのか、という問いかけを日常的にしておくことで、多様性を認めるうえでの疎外要因が見えてくるとともに、どうすれば多様性を認め合えるのかということに自然と目がむくようになるかもしれません。
4	子供たちに伝える「インクルーシブ」の定義は？大人になった時の具体的な未来モデルがありますか？	二羽先生	インクルーシブには決まったゴールやモデルがあるわけではなく、常に様々な人を巻き込んで模索していくものだとは私は考えています。ですので、子どもたちにインクルーシブの定義を教えてそれを実現していくよりも、様々な人たちと対等な関係で日常的に関わっていきける環境と、それを応援する大人がいるというインクルーシブな環境があれば、子どもたちは定義以上のことを経験から学び取っていくと思います。むしろ大人がそうした子供の経験を「昔はそんな子はいなかった」、「あの子はあなたとは違うからそんなことはできない」というように大人の常識の尺度で見ずに応援できるかどうかの方が重要かもしれません。未来のモデルも、大人が押し付けるのではなく、子ども自身がインクルーシブな環境の中で探求しながら描いたものこそが、子どもたち自身が創っていくインクルーシブな未来なのだと思います。
5	インクルーシブ教育は、利他主義であり、その環境で学ぶ生徒にとっては幸福度にもつながると思うのですが、インクルーシブ教育の環境にある子どもと、そうでない子どもの感性や幸福度に違いは生まれていますでしょうか。	二羽先生	私は社会学が専門なので、個人の幸福感といったところは専門ではないのですが、インクルーシブな組織体制の中では、不平等な関係性やいじめのような問題を、様々な立場の人々が協力して解決していきこうとする志向性があります。そのような中では、孤立や排除というような状況が見過ごされることは確実に少なくなるため、幸福感の個人間格差が少なくなるのではないかと考えられます。つまり、どのような環境でもある程度の幸福感を得られる子どもはいると思いますが、不幸だと感じる度合は、インクルーシブな環境にある子どもの方が少ないと想像されます。

6	田奈市の例で出てきた先生の方言が関西の方言のように聞こえましたが、インクルーシブな取り組みに地域差などはあるのでしょうか？	二羽先生	講演の中で政策による疎外要因の説明をしましたが、日本の教育は中央集権なので、基本的には全国にその疎外的な政策が適用されており、少なくとも書類上は地域差はないことになっています。ですが、特に教育の中で障害者や部落・在日外国人の差別の問題に向き合ってきた地域では、国の政策とは異なるインクルーシブな取り組みを独自に進めてきたケースがあります。市町村単位で地域ぐるみの取り組みをしてきた事例は、どちらかというに関西地域に多いようです。
7	二羽先生のユニバーサルデザインについてのお考えが知りたいです。	二羽先生	ユニバーサルデザインでは、どちらかという、継続的な変化を想定せずに、できるだけ多くの人アクセスしやすい統一的なデザインが推進されてきたように思います。ですが私が思い描くインクルーシブなデザインは、その時に関わる人が変われば課題も変わり、解決方法も変わってくるという一連の変化に柔軟に対応できるようなデザインです。一つの固定化されたデザインの中では必ず生きづらさを感じる人を生んでしまいます。物理的な設計の話では難しさもあると思いますが、現状で想定されている人にとっていいデザインであるだけでなく、今後そのニーズが変化した際にも対応できるようなインクルーシブデザインの方が、今後の課題に応えることのできる形ではないかと個人的には考えています。
8	遊具は設置後、地方自治体の管理になると思います。職員の方は数年で交代するイメージですが、現場のプロダクトのほかに、管理者側でインクルーシブ公園に対する正しい知識を維持・継続して頂くために、何か行っていることはありますか？	北村様	ハードの整備としては、遊び場のサイン板にインクルーシブ公園の理念や考え方を記すことにより当初の思いを普遍のものとして残すことができます。ソフト面としては、自治体様には、公園整備の部署だけでなく、福祉関係や子育て支援関係の部門と連携をとり、自治体が一丸となって関わっていくことをご提案しています。他には、インクルーシブ公園の運営指針を作らせていただいたこともあります。

以下のご質問は講演内でお話がございましたので割愛いたします。

9	学校や園をはじめ子ども達が育っていく教育環境の日本のインクルージョンの現状と海外との差違、それに対する考え方の違いについて
10	インクルーシブ教育をすすめていくために保護者としてできることは何かと考えています。アドバイスがありましたらお願いいたします。
11	インクルーシブな公園、知的障害があったり他にも、大人になってもそういう場所で遊びたい場合も、あると思うんです。異様な視線向けられる事を危惧してしまうんですが、そうならないように願ってはいます。
12	発達障害があったりすると中学生や高校生がこのような遊具で遊びたいともあります。しかし、多くの公園では12歳までの遊具が多いと思うのですがこのような遊具を使える年齢の幅を広げたりすることは可能なのでしょうか？
13	子どもからすれば、障害を持った先生がいないことが疑問の1つに上がる気がします。教育の場で働かれている、障害のある方は増えているのでしょうか。

多くのご質問ありがとうございました。